

フランス語 CALL——実験的導入顛末記

国際文化学部 市田良彦

(1) はじめに

大教センターでフランス語を教えていると、ときに考え込んでしまうことがあります。「こんなことして何になるんだろう・・・」

学生たちもおそらく同じような思いにとらわれることはあるでしょうが、その中身はおそらくちょっと違います。学生たちにとっては、ちょっとぐらいフランス語を勉強して何の役に立つの？ということでしょう。この時代、英語ならともかくフランス語はいったい・・・というわけです。そしてそういう問いに対してなら、フランス語の教師と言えることはたくさんあります。教師によっても答えは違うかもしれませんが、私ならまず、国際語としては英語だけで充分と思っている人たちが作る国際社会なんてろくなもんじゃなげ、と言うでしょう。そしてそこから、話を世界の現状や歴史について広げて行こうとするでしょう。

私が思う「こんなことして・・・」の中身は、まったく逆の方向を向いています。君たちにちゃんと勉強させてあげるだけの環境も材料も十分に提供できなくてごめんね、ということが第一です。1回1時間半の授業を週2回、40人規模のクラスで半年学んで「基礎ができる」なんて、教師の実感としては、まったくの嘘っぱちなのです。こんなことを公に言うてはいけないのかもしれませんが、正直なところそう感じています。まず、現行のカリキュラムで一通り文法を終えようとする、とんでもないペースで進まなくてはなりません。1年間かけたとしても大差はありません。そのペースで進んで「基礎が身についた」と本当に言えるようにするためには、学生諸君にはものすごく宿題、自習をやらしてもらわないといけません。けれども40人規模のクラスだと、そのチェックを毎回やって達成度を一人一人確認するようなことはまず不可能です。仮に私が1クラスしか受け持っていないならできるかもしれませんが、週に5コマも抱えているようなありさまでは夢物語です。

おまけに未修外国語とは文字通り、これまで学んだことのない言語なわけですから、その音に慣れるにはそれだけでも相当の努力を要します。耳で聞いて、自分で口にしてみることを、何度も何度も繰り返すことを、かなりの期間にわたって継続的に行わなくてはなりません。そんなこと、授業ではとうていできません！せいぜい、テープを渡して「家でやれ」と言うぐらいです。家でやっているかどうかのチェックを一人一人について行おうとすれば、これまたとんでもないことになります。

だから結局のところ、1年間、こちらも学生諸君もそこそこまじめに学習に取り組み、「良」の成績で単位を取ったとしても、一人でフランスに観光旅行に行くことはおろか、やさしい読み物なら読め

るなんていうことありません。入り口に立ったかな、という程度でしょう。もちろん、入り口に立てば後は中に入ればよいのですが、その「中」がコースとしてはとても貧弱です。入り口までの道もそこからの道も、ほとんどの人が、まあもう止めておこうと思うようなあり方をしているのです。なんか、教えている「言葉」というものに対してさえ、自分が失礼なことをしているのではないかと思ってしまう。多くの学生たちを「言葉」から遠ざけているだけじゃあないのか。どんな言葉でも、それを理解できたり使えたりすることは喜びのはずです。母国語についてさえ、それは言えると思います。私たちがふだん母国語を駆使して喜びを感じないのは、遊ぶことを忘れていただけだと思います。なのに外国語に関して、中途半端な苦痛だけを与えて終わるような（終わったという解放感は与えてくれるでしょうが）授業は、母国語に対してさえ罪作りなことをしている気分が襲われたりするわけです。母国語イコールただ楽であるだけの言葉という図式を植え付けることになるのですから。楽な言葉になった途端、言葉を使う喜びはまた忘却の彼方に遠のいて行きます。

（２）教材の作成

前置きが長くなりました。コンピュータを使った外国語学習（Computer Assisted Language Learning、略称 CALL）は、近年とみにその方法が研究され、かなりの効果があることも確かめられています。日本ではまだその大半が英語、それも初学者向けというよりは、中級以上の総合的能力検定試験において一定以上の点数を獲得することを主眼に開発されています。その導入は大学においても、今後必要不可欠になっていくはずですが、しかし私は英語の教師ではないので、その有効な使い方などに関しては生半可以下のことしか分かりません。ここでは、相対的に開発が遅れていると言っていい、未修外国語、それもフランス語に話をかぎって、私の実体験に基づいて思うところを記してみたいと思います。

結論から述べれば、CALL は私のフランス語教師としての悩みや不満を解消してくれる魔法の杖などではまったくありません。けれども少なくとも、学生と教師の双方にとって、もう少しは実のある、また面白い授業が可能になる有効な補助手段であることは確かなようです。国際文化学部のプロジェクトとして若干の予算をもらい、教材を自分で作って授業で学生諸君に半年間「実験材料」になってもらった（どうもありがとう！）貧弱な経験だけからも、そういう手ごたえは充分にありました。

はじまりはそのプロジェクトでした。どうも最近、色々な大学で CALL を導入することが流行っているらしい、外国語教師として一つその実態を調べて自分でもちょっと試してみるか、ぐらいの心持ちでした。京都大学の CALL 施設を見学させてもらい、独自に作成しておられる教材もいただきました。またインターネットで部分的に公開されている教材、市販の CD-ROM 版 CALL 教材なども調べてみました。そうしたなかから、次第にイメージが膨らんできて、おおむね次のような考えをもつにいたりしました。

1. 教材はどうも自分で作るほかないらしい。市販の教材の多くは自習を前提に作られています。また何よりも、それを作ったのはフランス人であり、学習者はフランス人にとっての外国人一般です。つまり日本人向けには作られていないのです。そんな教材を「自習せよ」と言って学生諸君に与えても、まあやらないでしょう。試みに、初級を終えた神戸大の学生の何人かに、代表的な

市販の初級教材を使ってもらいましたが、彼らにも、部分的にはまったく付いていけないところが出てきました。また日本の大学で作られている教材は、基本的に他の大学では使わせてくれません。主として、教科書とタイアップして将来商品化することを考えての措置だと思われます。

2. 授業の補助教材として有効なものを作りたい。既存の CALL 教材はだいたいパソコン画面上でやる問題集だと思ってもらえればよいようなものです。ネイティブの声を聞いて問いに答える、絵や動画を見て問いに答える、画面の空欄に文字を入力する、といった形式です。基本的に自習タイプか、宿題でやる問題集のような感じです。これだと教師の役割は「管理者」です。進行状況をチェックし、学生諸君の尻を叩き、最後にテストをする。もちろん、これにも大きなメリットはあります。少人数クラスでしかできないような進度や到達度のチェックをコンピュータのおかげでかなりの規模のクラスでもできるからです。しかしどうも、教えるほうとしては面白みにかけますし、何より初学者にとっては、教科書を読むだけではなかなか頭に入らないというのと同質の問題を抱えています。だから何とか、授業とうまく組み合わせられるものを考えたい。
3. 既存の教材は実のところあまりマルチメディアを活用できていない。音と動画をふんだんに使い、どんどん聞かせ、どんどん口を動かさせるというようなタイプの教材はほとんど見当たりませんでした。せっかくネイティブに役者として登場してもらっているのに、ちょっともったいない感じでした。ネイティブの授業と同じくらい、学生諸君にフランス語のシャワーを浴びてもらい、また緊張もしてもらおうというようなことにはなっていないのです。一つには技術的な理由もあるようです。何より、動画データはたいへんファイルサイズが大きくなりますし、音質を落とすようなことをすると初学者にはとても聞き取れない。母国語なら雑音混じりの AM 放送でも分かるでしょうが、初学者に細かい母音の差異を聞き取ってもらうためにはかなりの音質が必要です。音を優先させたために、実質的に動画はあきらめてしまった教材も多いのが現状です。しかしなんとか、口のかたちぐらいは鮮明に見せてやりたい。
4. CD-ROM よりネットワーク教材がいい。CD-ROM だと、何十枚と焼かなくてははいけないし、更新が大変です。少しづつ教材を作り変えたり、足したりするようなことは望むべくもありません。教師にとっては教科書丸々一冊書くのと同じかそれ以上の準備をしてからでないといじめられないわけですから。それに今は無理でも将来的に、進度や成績をデータとして残すことを考えれば（つまりログを取るためには）教材データもプログラムも最初から全部コンピュータに入っていたほうが断然いい。

というようなことで、結局、試験的に発音教材を作ることにしました。その完成品は

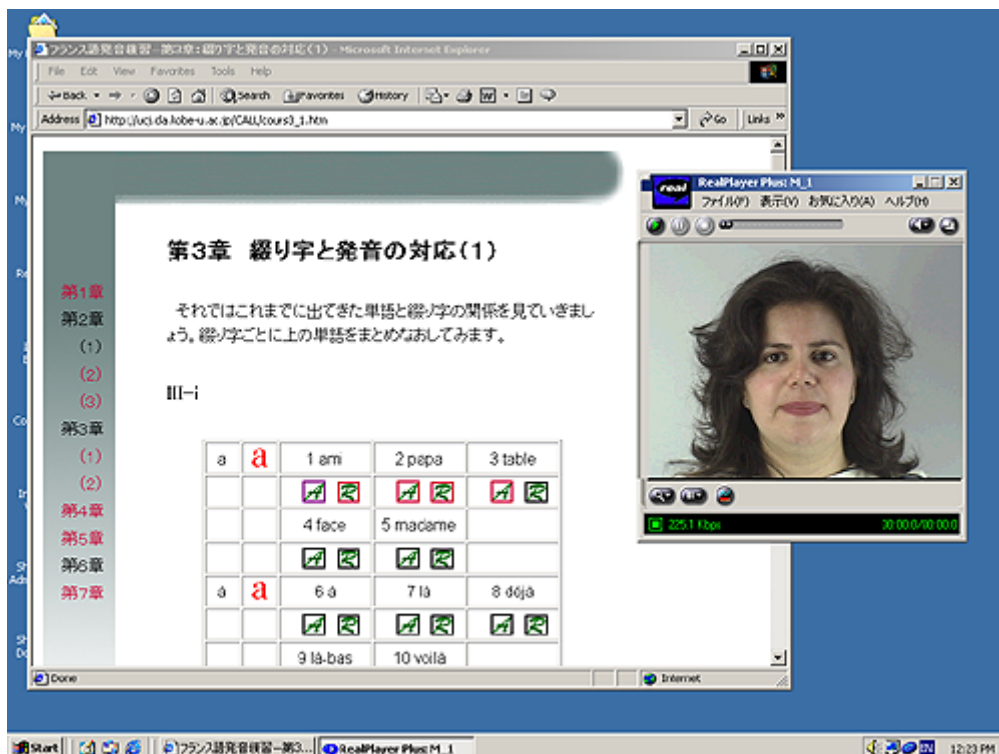
<http://ucj.cla.kobe-u.ac.jp/CALL/index.html>

にありますので一度覗いてみてください。また、もうすぐ

<http://call.cla.kobe-u.ac.jp/french/index.html>

にも入れる予定です。後者のサーバは国際文化学部 CALL プロジェクトの共同サーバです。これから試験的に作られた他の言語の教材も入っていくことでしょう。表紙の「発音編」という文字をクリックすると中に入れます。中身はこんな感じです。A をクリックすると女性（アドリアンヌさん）R をクリックすると男性（リシャルルさん）が出てきて発音してくれます。これぐらいの大きさだと口の

かたちもはっきり分かります。ページデザインは素人くさいですが、それはご勘弁を。



目指したことは何よりも、この教材をちゃんとやればフランス語の発音と綴り字がいちおう体系的にカバーできるようになる、ということです。12個の母音、日本語にはない子音が区別でき、音と綴り字の規則的な関係もだいたい見通せるようにする。岩本、坂本、両先生にも手伝ってもらい、単語を吟味し、順序を工夫しました。

技術的な難点はやはり動画データにありました。ある大学のオンライン教材はほんの数秒の動画でサイズが数百キロという QuickTime ファイルを使っていましたが、これでは学内の 10BaseT のネットワークに乗せて4、50人規模のクラスで使うのはかなりつらいだろうと予測できます。繰り返し見るのに、いちいち数秒も待たされたり、エラーが出てしまっただけは台無しです。画質、音質、ファイルサイズの適当な組み合わせを見つけるために、いくつかのタイプの mpeg も試しましたが、よいものだとクライアントマシンのほうに CODEC をわざわざインストールしなければならず、現段階では非実用的であるようでした。それで結局、ストリーミング方式を採用することに。それも、普通はあまり使われないような高画質設定にしてです。実験してみたところ、これだとそこそこの画面サイズ、かなりいい音質で、数十人同時アクセスでも大丈夫そうでした。しかし後に実際に授業で使ってみると、音質についてはもっと良くしたいと思いました。学生にはやっぱり細かいところが聞き取りにくいのです。ストリーミングにしたもう一つの大きな理由は、著作権、肖像権問題です。ダウンロードしてディスクに保存できてしまうと、ちょっと困った事態が起きないともかぎりません。

ネイティブスピーカーは男女二人を用意しました。フランス人にも発音の個人差、地域差はありますし、声の高低は男女でかなり違います。撮影アシスタントとしてゼミの学生に手伝ってもらい、収録にそれぞれ半日ほどかかったでしょうか。素人作業ですので、ライティングなどにはけっこう苦労しました。でも、にわかディレクター気分です。カット！なんつたりして。

しかし何といっても、面倒なのは編集作業です。数えてみたら総計500近いファイルに、DVデータを切り分けていかないといけないのです。そしてファイルコンバート。同時にhtmlでページを作る作業。ここらはプロジェクトに加わってくれた学生と一緒に突貫工事です。まあこれでしばらくホームページなんか作りたくないというくらいうざりました。やや困ったのは、発音記号です。発音記号をフォントとしてもっているユーザーなんてほぼ皆無でしょうから、こちらで画像データとして作るほかない。あれやこれやの作業には、かなり昔PhotoshopとDTPに凝って、フランスで同人誌みたいなものを友人たちと作った経験が役に立ちました。フランス人のプロにQuarkExpressの使い方を習った日本人なんて私くらいではないだろうか。どうでもいいことです。

(3) 授業での使用

さて授業での使用です。とにかく一度やってみようと、5月の中ごろ(通常の授業では発音のことはいちおう終わっている段階です)あるクラスで1コマ全部使ってガイダンスと使う練習のようなことをしてもらいました。物珍しさもあってか、学生たちはきゃあきゃあ言って画面に向かっていました。まだ大学に入ったばかりで未修外国語の授業にもくたびれていない、勉学意欲に溢れる時期です。反応としては上々。私は各席を回って操作の仕方の細かい点を教えたり、発音を直したり、かなり忙しく動かざるをえません。1回やってみると、やはり少し授業での使い方のようなものも見えてきます。まず気づいたよい点として、個々の席を回って指導できるということです。通常の授業ではそれがほとんどできない。一人の学生と一対一で話している間も他の学生はちゃんとやることがある、これはけっこう大きな利点です。そうか、席を動き回ればよいのだなと気づきました。

それから、やはり1コマ全部をCALLに当てるのは継続的には無理だということ。初回の授業でさえ、最後のほうは学生もけっこう飽きはじめてようで、なかにはWebで遊んでる奴までいました。そこで次回からは、授業の最初15分から20分を充てることにしたのですが、これは正解でした。学生は教室に入ってくるとさっさと自分ではじめてくれます。

学生によってかなり進度にばらつきがあります。けれどもそれは「できたから先に進む」というより、とにかく早く先に進みたい学生と、ゆっくり何度もやらないと気がすまない質の学生がいるからです。早く進んでいる学生には「ほんまにできてんのかー、これもう一回発音してみい」とか言って即席テストをやり、「はい、ここからやり直し」という具合に。あまりに遅い学生には「とにかくざっとここまで聞いてみ」と促します。Web教材ですので、大学の端末室を使わなくとも、いつでもどこからでも、ネットにつながったパソコンさえあれば練習はできます。ただ音質と画質を優先したために、家から56kモデムでアクセスした場合には実用に耐えない状態になります。それでもサーバのログをチェックしていると、授業時間外に大学内から利用する人間と、自宅や下宿から利用する人間が毎日数人づつはいました。一クラスでの試行にしては、まあまあの自習状況と言ってよいのではないのでしょうか。

教材の最後に、やや長いスキットを二つ置いています。最終目標として、その暗誦テストをやることにしました。日本人初学者にはけっこう高いハードルです。しかし予想どおり、学生はそれで必死になってくれました。ただし、そこを暗記さえすればいいとナメてかかり、細かいポイントを無視しがちな学生も出てきて、その軌道修正にはけっこう骨が折れます。君の発音はここがおかしい、それ

については前の単元のここへ戻ってみる、といちいち指摘してやらなくてはなりません。発音は、一度間違っただけを口にしてしまうとなかなか直らないのです。

しかしそういう苦労をしていると、一人一人の学生の個性のようなものまで見えてきて、教師としてはただ喋っているだけの授業よりはるかに楽しい。ときには「先生、あっち行って！気が散る」なんてことも言われますが。

予測が大きく外れたのはテストです。こんなに時間がかかるとは思わなかった！初学者は、間違えることを怖がって話すスピードを落しがちになるうえ、こちらもついその場で癖を直したりするものだから、一人一人にかかる時間が予想より大幅に長くなり、結局、休み時間や放課後も使って二日間かかってしまいました。一クラスでこれでは、相当にきつい。担当クラス全部で同じ方式を適用することはとうてい無理でしょう。工夫の余地がかなりありそうです。しかし一対一の対面式口述テストというのは、それなりの意味もあります。学生にとっては相当のプレッシャーなようで、数日前からみな必死に練習したそうです。社会人学生のなかには、緊張して胃が痛くなった、こんなのは何年かぶりです！と言っていた人もいますが、そういう苦情は教師冥利につきるというもの。きっと何年経っても覚えているでしょうから。

技術上の問題点として浮上したのはやはりネットワークです。サーバへの負荷自体は大したことはなかったのですが（CPU とメモリの使用率の推移を調べました。ハードディスクは 64bit 接続の Ultra160SCSI、10000 回転ですから、これ以上は RAID にしないかぎりどうしようもない。RAID を導入するほどの予算はありません）ときどき何台かの端末で同時に接続エラーが出ます。新ネットワークへの移行によりその問題はたぶん解消されているでしょう。光ファイバー、ギガビットスイッチ、100BaseT の環境で問題が出たら、それは逆にネットワークのどこかでハードウェアがおかしいということでしょう。なんか問題出そうな悪い予感もしてはいるのですが・・・ 10人ぐらいの学生が同時に「先生、おかしいで」と手を上げるとけっこう困ります。

（４）終わりに

現在、大教センターの概算要求として LL 教室 2 室分の CALL 教室化を要求しています。CALL 教室というのは従来の LL 設備に、パソコンが合体したような施設です。学生ブースのモニターに一齐に同じ映像を送ったりできるのは従来の LL 教室と同じですが、それに加えて、教師側から一人一人の学生の端末操作をチェックできたり、学生ブースから教師のほうにデータを送ったりが簡単にできます。関西圏でもかなりの大学ですでに導入されており、今後はむしろ LL 施設だけの新設や拡充のほうは稀になっていくでしょう。パソコン端末室としても使えるわけですから。英語は市販の CALL 教材もどんどん増えていますし、語学教育の大きな柱になっていくはずです。本学でもし実現されれば、すぐにでもやってみたいと思うことがいくつかあります。まず、学生に自分の声を聞いてネイティブの声と比べることがすぐにできるような教材を作る。また、音声認識の技術進化にはすさまじいものがあり、発音を点数化してくれるようなプログラムや、声の波形をその場で見せてくれるようなプログラムも存在しますので、それらもぜひ使ってみたい。

ただ教材作成には人手、時間、お金がほんとうにかかります。パソコンが速くなったおかげで、編集作業、データのエンコードなどにもなうストレスは相当軽減されていますが、それでもマルチメ

ディア教材を作るには一人でなんかやられてないところがあります。そういうところにも予算的配慮をしてしてもらえれば(つまり「箱もの」として設備を導入するだけでなく)、それだけの成果はきっと上がると思うのですが。

語学教師、特にフランス語教師は私も含めほとんどが典型的な「文系」の人です。そういう人間はえてして、複製技術と人間の技を対立的に捉えがちで、CALL なんかやったら教師はいらなくなるとか、教師の話術、名人芸によってこそ生きた言葉は伝わるといった意見もちらほら耳にします。私も数年前はそんなイメージをもっていました。けれども今の私に言わせれば、数十人のクラスで講義に近い形式の授業を週に何回かやっている現状のほうが複製技術的です。同じことを一人で喋っているだけです。何年も教師稼業にどっぷり浸かっていると、出てくる冗談まで同じになる。大教センターの語学授業は教師が複製機械化しているわけです。それに比べたら、まだほんの半年の経験ですが、CALL を取り入れた授業のほうがよほど「人間的」なように思えます。何より、一人一人の学生と接する時間が多くなり、少人数の会話クラスに近い環境が作れる。そうすると「生きた関係」を臨機応変にさばいていく名人芸が求められることになります。これは今までの授業ではあまり要求されなかったことです。私もこれまで、学生にやる気が見られなかったりすると、つい何も期待せず話をこなすだけになったりすることがありました。まあこなせばよいか、と。今回、実験台になってくれたクラスではそういうわけには行きませんでした。いやでも学生たちのなかに入らないといけない。これはまことに「文系」的な事態ではないでしょうか？